

形容詞「高い」の使用実態について (3)

——「X 力」の程度を表す用法——

嶺 田 明 美

1. はじめに

「高い」は、国立国語研究所(1972)にあるように、中核的な意味として基準となる場所や面からの垂直方向への延長であることを示す。ここから意味が拡大し、価値が大きいことやすぐれていることを表し、さらに、すぐれているという概念が失われて、単に程度や性質が著しいことを示す。また、「強い」については、飛田ほか(2012)では、(1)程度がはなはだしい様子でプラスマイナスのイメージはない、(2)頑健で耐久性がある様子でややプラスイメージを持つ、(3)力量・技術・能力がすぐれている様子でややプラスイメージを持つ、とし、程度の高さについて客観的に述べる抽象度の高い語であるとしている。「高い」と「強い」は、程度のはなはだしさや、すぐれている様子を表すことが共通の概念であると言える。

筆者はあるものと X について、その性質の程度が大きいことや、すぐれている様子を示す場合、「高い」「強い」「大きい」などとの間でゆれていること、「力」は、ふつう「強い」と結びつくが、他の形容詞との間でゆれがあることを指摘した(嶺田; 2015, 2016)。本稿では、「力」と接辞「一力」を伴う語(以下「X 力」と呼ぶことにする)が、プラス方向の程度を表す場合、「高い」「強い」「大きい」などの間でどのようなゆれが見られるかを中心に記述する。

2. 方 法

読売新聞データベース「ヨミダス歴史館」で、「力が高」「力が強」「力が大」を検索語として用例を収集した。本文記事検索可能な最初の年である 1986 年～1995 年の 10 年間¹と、その 10 年後の 2006 年～2009 年の 4 年間を対象とした。2006 年からは「X 力が～」の用例が多く、4 年分で 1986 年からの 10 年間とほぼ同じ度数になり、同じような語例が増えるだけであったため 4 年分とした。中央紙・地方紙、朝刊・夕刊のすべてを対象にした。後日の再掲載や「X 力」を含んだ用語の解説、記事内容がほぼ同じで対象の語が含まれる 1 文が全く同じ場合は、どちらかの記事を使った。

「X 力」と並列関係にある語が「X 力が」の前に置かれている場合は、「が高い」の直前の語²だけを対象とした。形容詞「高い」「強い」「大きい」および動詞「高まる／高める」「強まる／強める」とその活用形を対象にし、「X 力が高大」「X 力が強大」などの「高・強・大」を含む漢語や「強み」

1 1986 年のデータは、8 月 31 日分までは、記事本文データの検索はできないため、全体数は少ない。

2 例「警察官個々の役割意識、能力が高い、というのだ」(1995. 6. 27) …「能力」だけを対象にし、「(役割)意識」は対象にしない。

は除外した。「大きい」は、その力の大きさがある事態に影響したことを示すような用法がある³。これは除外し、そのものごとの力を示す用法だけを対象にした。

なお、必要に応じてほかの年代も調査し、国立国語研究所構築のコーパスも適宜利用した。表記については、異体字は区別せず新字体を用いた。

3. 結 果

「X 力」の語構成は、1 要素だけではない場合がある。「X 力」にほかの要素が前接し、1 語として成り立つ場合があるが、この場合の第 1 要素は区別せず⁴に用例数を数えた。その結果、「X 力」の異なり語数は 253 語であった。この中から調査対象期間内で、20 以上の用例があった語を、「高」「強」「大」のそれぞれの使われやすい語、使用頻度に変化のある語、その他に分けて考察した。また、「X 力」の述語については、まずは形容詞類と動詞類を区別せずに数え、場合によってはそれぞれについて記述した。

3-1. 「高」が使われやすい語

「高」が使われやすい語は、20 以上の用例があった語のほかに、10 以上の用例があった語も併せて、使用された年ごとに表した（表 1）。

表 1 「高」が使われやすい語（15 語）

空欄は 0

	1986～1990			1991～1995			2006～2009		
	強	高	大	強	高	大	強	高	大
攻撃力					1		1	13	
総合力				1	1			22	
守備力							1	12	
ブランド力							3	21	
収益力		4			3			6	
集客力		1			3		3	24	2
信用力		3			3			10	
得点力		2			2			10	
免疫力		3		2	1		5	18	
学力		5			3			21	
能力	3	48	10	3	91	5		424	6
購買力	1	2	1		6		1	9	2
吸収力	1	2	1		1			14	1
技術力	1	2			2			29	
集中力	1	4			13			96	

3 例「田舎球団と酷評されたカープを球界をリードするチームにまで成長させたのは、山本浩の力が大きい」（1986. 10. 28）…山本浩の力がチームに大きく影響したことを示し、力の大きさそのものを示す例ではないと判断した。

4 たとえば、「圧力」は、「圧力」1 要素の用例以外に、「国際的圧力」「歳出圧力」「歳出増加圧力」など 2 要素以上が結合している場合もある。これらは区別せずに「圧力」として扱った。

「高」が使われた 15 語のうち、「攻撃力」「総合力」「守備力」「ブランド力」は 2006 年からの用例がほとんどである。接辞「力」は、種々の語基と結びついて能力を示すことができ、新しい複合語を生み出しやすい。表 1 で示した語が新しいのかどうかを見るために、『日本国語大辞典第 2 版』（以下『日国』）で用例の成立年（刊行年）を見た。結果は以下の通りである。

学力	1714 年「我 <u>学力</u> 、異国にも隠れなく」（浄瑠璃・天神記）
能力	1820 年「抑牛痘の <u>能力</u> は、人に種ゆれば、其気先ず付接したる所に伝染し」（遁花秘訣）
購買力	1891 年「国民 <u>購買力</u> の次第に減少するは」（大島貞益「情勢論」）
吸収力	1893 年「Absorptive Power <u>吸収力</u> ・吸収能」（伊藤潔「電気訳語集」）
攻撃力	1903 年「砲は（中略） <u>攻撃力</u> も弱い」（国木田独歩「別天地」）
技術力	1952 年「そのときの <u>技術力</u> はどうか」（亀井勝一郎「現代文学にあらはれた知識人の肖像」）
総合力	1939 年「芸術作品の価値が、その形象化の <u>総合力</u> において一つの感動或いは陶醉として訴えて来ない所以は」（窪川鶴次郎「現代文学論」）
集中力	1910 年「此人は恐るべき意志の <u>集中力</u> を有している」（森鷗外「花子」）
収益力・集客力・守備力・信用力・得点力・ブランド力・免疫力…見出し語なし	

「学力」「能力」を除けば、明治後期以降の用例であり、7 語は『日国』には見出し語がなかった。これらは比較的新しい漢語であると言えよう。嶺田（2015）で述べたように、近年は「X が」の述語として「高い」が種々の語と結びつく傾向を示しているため、比較的新しく、かつ、その価値や意味が、上方向にプラスであることを示せる場合には「高」が使われやすいと思われる。

「学力」は結果として現れる数値の上下で判断されることが多いため、「高い」が用いられている。現れた 29 例は、すべて「高い」で表されている。学力の上下を表す明治期の例は、「現在学力もさがったようだ」（坪内逍遙「当世書生気質」1885-1886 年『日国』用例）などがあり、明治期から使用されていたこともわかる。しかし、国立国語研究所『近代女性雑誌コーパス』（以下『女性』）では、「学力」16 例が検索できるが、上下の意味で表される例はなく、

「学力の優等なるものを」（『女学雑誌』1894）、「単に学力が増したりとて」（『女学雑誌』1895）、「学力深邃」（『女学雑誌』1895）、「学力不十分なるが故に」（『女学雑誌』1894）

など優劣を示す表現だけである。また『国民之友コーパス』（以下『国民』）では 11 例あるが、優劣や上下を示す表現は伴っていない。まだ「高い・低い」で表すことは一般的ではなかったようである。

「能力」は、その能力の質の高さに着眼した場合は「高」が使われる。「能力」の近代の例では、『女性』に 38 例あるが、その度合いを示す表現はない。『国民』では 41 例あるが、上下の意味で表される例はなく、「自家の能力を大ならしめざる可らず」「學術以て智の能力を殖やし」「一もあることなきを以て軍用にとって、意想外に能力少なく」などが散見される程度である。

「学力」「能力」自体は、ほかの語よりも比較的古くから使用されているが、「高」で表現されることは嶺田（2015）で新聞を調査した 1874～1989 年（すべての年の調査を行っていない）の間にはなかった。価値や質が「高」で表現されるのは近年に用例が集まっており、その使用の拡大とともに使われ始めたのではないと思われる。

「能力」は「強」「大」を述語とする例もあった。しかし、以下の例 1～例 6 のように、同じ「能力」

であっても「高」「強」「大」がそれぞれ使われており、上方向への高さ・広がり・大きさ・強さのどれに着目するかによって、ゆれているようである。

- 例 1) 落葉樹の方が常緑樹よりも浄化能力が高い (1987. 4. 29)
- 例 2) たとえばアシやマコモは川や湿地に生え茂り、富栄養素を吸収分解する浄化能力が強い (1994. 9. 9)
- 例 3) 肝細胞は再生能力が高く、肝臓の 3 割が残っていれば正常に機能するため (2008. 2. 3)
- 例 4) 肝臓は再生（肥大）能力が強いので、提供者側の残った四分の三の肝臓も元通りの容量に戻り (1987. 4. 7)
- 例 5) 二酸化炭素の吸収能力が高いマングローブを育て (2008. 5. 12)
- 例 6) 日本から東へ伸びるこの中緯度帯は、(中略)、海の炭酸ガス吸収能力が大きい海域と考えられていたが (1992. 3. 28)

3-2. 「強」が使われやすい語

「強」が使われやすい語も、20 以上の用例があった語のほかに、10 以上の用例があった語も併せて、使用された期間ごとに表した。(表 2)

表 2 「強」が使われやすい語 (13 語) 空欄は 0

	1986～1990			1991～1995			2006～2009		
	強	高	大	強	高	大	強	高	大
火力	3			12			22		
筋力	3			3			8		
勢力	95		5	91		3	75		
精神力	2			5			10		
生命力	7			14			25		
腕力 ⁵	3			7			4		
力	68	1	16	141	2	15	198	18	17
繁殖力	11			17			98	3	
結束力	2			3	1		16	5	
発言力	28	3	2	40	10	5	40	9	1
抵抗力	3	3	1	11	1		10	3	1
感染力	6	1		10			105	2	
支配力	2			8	1		9	1	

「力」はもともと「強さ」で表現されるため、「X 力が強」で表現されることは自然なことである。しかし、「高」で表される例が、「力」「繁殖力」「結束力」「発言力」「抵抗力」「感染力」「支配力」に出てきている。

まず、「力」「繁殖」については以下のような例があった。

5 腕力（かいな力）は含まない。

例 7) (使い捨て布製メガネふきは眼鏡の) 汚れをとる力が高まる (1989. 7. 19)

例 8) 会社の経営も愚直に、自分なりに進めます。そこに、社員たちの互いの信頼感、愛情が加われば、
チームの力が高まるのだと考えています (2006. 12. 12)

例 9) 日本の子供の考える力が高くないことを示しています (2009. 3. 21)

例 10) (植物のアレチウリは) 一個体がつける種は数千～数万粒にもなり繁殖力が高い (2006. 10. 20)

例 11) 年平均 4～5 頭の子どもを産むイノシシは、シカなどと比べ繁殖力が高く (2007. 9. 2)

ここにあげた例を含めて、「高」で表される「力」「繁殖力」の力は「能力」の意味合いが強い。3-1. で述べたように、「能力」は「高」と結びつきやすく、近年の「高」の使用の広がりに伴って、このような例が出てきている。また、「繁殖力」は「繁殖能力」とほぼ同義で、「繁殖能力」は 9 例あったが、すべて「高」であった。

例 12) ナマコは繁殖能力が高い生き物ではないので (2007. 1. 29)

例 13) イノシシは、非常に繁殖能力が高い (2008. 1. 5)

また、次の例 14 は、「力」が「圧力」の意味で使われている。「圧力」は 3-4-2. で述べるように近年には「高」で表現される傾向がある。

例 14) 1 本あたり 8 本のボルトで車軸に固定されているが、ボルト 1 本が折れただけで、残りのボルトにかかる力が高まって次々と折れてしまい、最後の 1 本が折れて脱輪に至るケースが多いという (2006. 12. 6)

次の例 15 は、前の文で「力が弱まる」に対して、後の文では「高まる」が使われている。例 16 は政治的な力の表現である。これらは「能力」や「圧力」の意味ではなく、そのものが持つものごとに作用する力の意味であり、やや不自然な感じがする。

例 15) これで竹下派の力が弱まるのは必至と見ている。相対的に三塚派の力が高まることへの期待感もある (1992. 10. 15)

例 16) 「米国の政治は、伝統的に東海岸、中西部が中心だったが、現在は西部の力が高まっている」との見方を示した (2009. 8. 24)

「力が高」は、21 例あったが、そのうちの 19 例は「能力」「圧力」の意味で使われており、「力そのもの」の例は、上記の例 15・例 16 の 2 例だけで数は少ない。また、どちらも動詞「高まる」で、力の目盛りが上方向に変化している過程を示しており、力が高い状態にあることを示してはいない。全体としてプラス方向への表現に「高」が使われ始めていることを考えると、「力そのもの」も、上方向への変化の過程に着目したときに「高まる」が今後も使われる可能性があると思われる。

「結束力」は『日国』には見出し語がなく、「発言力」は 1951 年の用例、「支配力」は 1947 年の用例で、比較的新しい漢語である。3-1. で述べたように、新しい語は「高」で表現される傾向があるため、その力がプラス方向への高さやすぐれていることに着眼した場合は、「強」との間でゆれが生じる。例 17・例 18 は派閥の結束力を、例 19・例 20 はチームの結束力を、例 21・例 22 はグループの発言力を述べた例であり、いずれも同じような文脈で使用されている。

例 17) (ある政治派閥が) 他派に比べて結束力が高いと踏んだからだ (1995. 8. 5)

例 18) これに対して宮沢氏は「田中派は結束力強いし、政策面でもよく働いている」と持ち上げ (1986. 11. 25)

例 19) (J2 リーグのチームで) 追う方が強い。言葉は悪いが、スリルがある方が結束力が高まる (2006. 10. 22)

例 20) 「1 年生の時から一緒にやってきた気の合う、結束力強いチーム」と言い (2015. 6. 29)

例 21) 一連の学生運動の激発で、保守グループの発言力が高まったことは否めない (1987. 1. 1)

例 22) 東欧各国でも、これによって保守派の発言力が強まって改革のテンポが鈍くなる恐れが指摘されている (1988. 5. 13)

22 例あった「発言力が高」は、すべて動詞「高まる」が使われており、例 15・例 16 の「力」と同じように上方向への変化の過程を示す場合に使われている。

また、3-4-3. の「団結力」の項で述べるように、「団結力」は「高」の例が近年に出てきている。関係の結びつきを示し、「まとまる力」という中核的な意味の共通性がある「結束力」も「団結力」と同じように、今後、「高」の使用例が増える可能性がある。

「感染力」は「高」の例はあるが、全体からするとまだ少なく、「強」が使われやすい傾向にあると言える。「支配力」は全体の用例数が少ないため、指摘にとどめる。

3-3. 「大」が使われる語 (1 語)

「電力」は「大」が使われる傾向が強い。近年に「強」「高」も出てきているが、わずかである。

表 3 「電力」

年	1986～1995			2006～2009		
	強	高	大	強	高	大
度数	0	0	13	1	2	8

3-4. 使用頻度に変化のある語 (5 語)

傾向が語によって異なるので、同じような傾向を示す年をまとめて表 4 から表 10 に示した。各表の割合は、それぞれの期間内で、「高」「強」「大」が使われた頻度を示した。度数が少ない場合は割合を示していない。

3-4-1. 「競争力」

「競争力」は 1996 年～2005 年も調査した。1993 年までは「強」46 例に対し「高」14 例で、「強」がよく使われている。1994 年～1999 年では、ほぼ同程度になり、2000 年からは、「高」56 例に対し「強」26 例で、「高」がよく使われていることがわかる。

表 4 「競争力」

年	1986～1993			1994～1999			2000～2009		
	強	高	大	強	高	大	強	高	大
度数	46	14	0	33	38	0	26	56	0

以下の例 23・例 24 はともに近年の例で、企業の競争力について述べている。例 25・例 26 は、動詞の例である。「強」は力の強さを、「高」は力が上方向に大きいことを表し、すぐれているという意味合いは薄い。

例 23) 再編を通じて、競争力が強い企業が誕生することは望ましい (2007. 4. 30)

例 24) 国内でも、女性が活躍できる企業は競争力が高く、利益率が高くなっている (2006. 6. 8)

例 25) 円高で輸入車の価格競争力が強まっていることが好調の主因で (1994. 9. 7)

例 26) 港としての国際競争力が高まることで、企業進出などが期待される (2008. 11. 3)

3-4-2. 「圧力」

「圧力」は用例数がほかの語と比較すると多い。政治経済の分野で、例 33～例 35 のような「ドル・円／買い・売り圧力」「(株の) 上昇圧力」など定型的な使われ方をするためである。表 5 を見ると 2006 年までの調査期間内は、「強」が 6 割強、「高」が 4 割弱であるが、2007 年からは、「高」の割合がやや高くなっており、変化が見られた。

表 5 「圧力」

年	1986～1990			1991～1995			2006			2007～2009		
	強	高	大	強	高	大	強	高	大	強	高	大
度数	198	101	2	223	126	2	62	34	1	132	121	1
割合	65.8	33.6	0.6	63.5	35.9	0.6	63.9	35.1	1.0	52.0	47.6	0.4
物理的	2	12	2	4	32	2	0	16	0	2	27	0

「圧力」は大きく二つの意味で使用されている。単純に物理的な押す力 (例 27～例 29) と、行動を押さえつけるような外から圧迫する力 (例 30～例 35) である。

例 27) [暮らしの安全ノート] 梅ジュースのガラス製ポット爆発 発酵で圧力が高まる (1982. 8. 17)

例 28) 浅間山などの溶岩は安山岩でねばっこく、下からの圧力が強くならないと噴火しない (1986. 11. 22)

例 29) 昭和基地や白瀬氷河の水は何万年も前の水ですから、それこそ絶品。気泡の圧力が大きいので、氷をふろに入れると、氷が解ける時、気泡がはじけて本当にいい音がしますよ」と渡辺さんは笑った (1987. 7. 10)

例 30) 農業州出身議員から対日農産物輸出の圧力が高まる可能性も出ている (1986. 11. 6)

例 31) 貿易黒字が増え、アメリカなど諸外国からの (市場開放の) 圧力が強まっているためで (1987. 6. 30)

例 32) 「議会の圧力が大きかったのだろうが、個人情報保護法違反だ」と批判 (2006. 3. 15)

例 33) ドル売り・円買い圧力が高まり (1987. 6. 3)

例 34) 再び、ドル売り (円買い) 圧力が強まる、との警戒感も出ている (1987. 1. 23)

例 35) 物価の上昇圧力が大きく、社会の潜在的リスクは無視できない (2007. 10. 12)

表 5 には物理的な表現の度数を示した。「強」がやや多い 1986 年～1995 年および 2006 年であっても、物理的力を表す場合の述語は、「高」が合計 60 例に対し「強」が合計 6 例であった。物理的力の場合は「高」が使われた傾向が見られる。「大」は用例数が少ないが、1995 年までの「大」4 例、す

べてが物理的圧力を示している。

3-4-3. 「団結力」

2010 年～2015 年のデータも追加して表 6 に度数を示した。1995 年までは、「高」は 1 例（1989 年）だけで、「強」が使われている。2006 年以降は、「強」41 例に対して、「高」21 例で、「高」が使われ始めていることがわかる。

表 6 「団結力」

年	1986～1995			2006～2015		
	強	高	大	強	高	大
度数	11	1	0	41	21	0

「高」の形容詞の例は、2014 年に 1 例あっただけで、1989 年の 1 例と 2006 年以降の例とあわせた 22 例は、すべて動詞「高まる」であった。団結力の高い状態ではなく、変化の過程を示している。一方、「強」は形容詞「強い」33 例に対し、形容詞「強くなる」3 例、動詞「強まる」16 例で、状態を示している例が多かった。例 36 のようにその状態にあるときには「強い」が使われ、例 37 のように「団結力」が一番高い状態に向かっていることを表すときには「高まる」が使われる傾向があると思われる。

例 36) (ある高校野球部のこと) 団結力が強く、過去最高と並ぶベスト 16 以上を目指す (2007. 7. 4)

例 37) (あるプロ野球チームのこと) 「李承ヨプがいない危機感から、むしろ早めの準備が出来た」と逆に 団結力が高まっていることを明かした (2009. 3. 3)

3-4-4. 「影響力」

1995 年までは、「強」と「大」が同程度であるが、2006 年からは「強」が優勢で、「大」も 25% 使用されている。表 1 に示したように、力の表現では、「大」は「高」「強」よりも全体として少ないが、「影響力」はほかの語よりも「大」が使われる傾向があるのが特徴的である。

表 7 「影響力」

年	1986～1992			1993			1994～1995			2006～2009		
	強	高	大	強	高	大	強	高	大	強	高	大
度数	57	0	43	12	3	10	24	0	19	130	5	45
割合	57.0	0	43.0	48.0	12.0	40.0	55.8	0	44.2	72.2	2.8	25.0

「強」と「大」は、次の例 38～例 41 のように、個人や組織・団体のほかに及ぼす影響がプラス方向に大きいことを示し、また、例 42 のように 1 文に「強」と「大」が両方使われている例もある。「強」は勢力のそのものの衰えがない様子を、「大」は勢力の 2 次元的な広がりに着眼している。

例 38) 竹下元首相の影響力が強い内閣と言われているだけに (1989. 9. 22)

例 39) 青少年に対するマンガの影響力が強くなっていることを受け (2006. 7. 25)

例 40) 国鉄のストは直接国民の足を奪うだけに影響力が大きい (1987. 2. 24)

例 41) 高校スポーツ界は指導者の影響力が大きい (1988. 1. 9)

例 42) 研究会は「社会的影響力」の強さによってメディアを 3 段階に区分し、最も影響力が大きい「特別メディア」にだけ、放送法の規制を残すとしている (2008. 2. 19)

1992 年までは、「強」「大」だけだが、1993 年に「高」が 3 例現れた。1994 年～1995 年は「高」はなく、2006 年からは再度「高」が 5 例あった。この 8 例はすべて動詞「高まる」で、形容詞の例はなかった。「発言力」と同様に、その高まりの目盛りがプラス方向に変化する過程に着眼したときに使われるのではないか (例 43・例 44)。

例 43) 中曽根元首相の影響力が高まる可能性もある (1993. 4. 6)

例 44) オープンキャンパスの影響力が高まった理由について (2007. 8. 17)

この後の年代についても、「影響力が高」を検索したところ、2010 年 3 例、2011 年 4 例、2012 年 2 例、2013 年 2 例、2014 年 4 例、2015 年 4 例でやや増えつつある。2014 年には形容詞が 1 例 (例 45) あった。

例 45) 影響力が高いこうした論文を多く発表する研究機関は、研究の競争力が高いと評価される (2014. 4. 16)

3-4-5. 「魅力」

魅力は、あるかないかであって、その程度を表す述語との共起は不自然に感じられるが、近年は「高」で示される例が増えている。「魅力」とその程度を表す形容詞が共起された比較的古い新聞の例では、「薄い」で (例 46・例 47)、「濃い」は用例がなかった。

例 46) [スクリーン] 鞍馬天狗「白馬の密使」・魅力が薄い “超人” (1956. 11. 7)

例 47) [テレビ週評] 意外に魅力が薄い ローマ・オリンピック開会式 (1960. 8. 31)

もともと「魅力」にある「すぐれている」という意味合いが逡減し、それに伴って程度の大きさを示す語と共起するようになり、現代では、「高」が広がっているため、「高」と結びついたのではないかと考えられる。

表 8 「魅力」

年	1986～1992			1993～1995			2006～2009		
	強	高	大	強	高	大	強	高	大
度数	0	9	8	1	7	6	0	33	12

以下に用例をあげた。

例 48) (アンケートの結果の記述文)「各党幹部の個人的魅力が強かったから」16% (1993. 8. 8)

例 49) 対馬は観光投資先としても魅力が高く、未開拓の部分も多い」と語り、大亜グループとしての追加投資の好機もうかがう (2006. 12. 20)

例 50) こうした状況からみると、競売物件は現時点では、余暇を過ごすための別荘地や、老後を地方都市で送ろうとする人には魅力が大きい (1987. 7. 23)

3-5. その他

「求心力」38例、「経済力」19例あったが、「高」「強」「大」のどれもがそれぞれの年で使用されており、傾向がつかめなかった。「求心力」は、2006年以降、「高」が多いが、これは、2008年に8例あるためである。用例数をあげるにとどめる。

表9 「求心力」

年	1986～1990			1991～1995			2006～2009		
	強	高	大	強	高	大	強	高	大
度数	1	2	0	6	8	0	5	16	0

表10 「経済力」

年	1986～1990			1991～1995			2006～2009		
	強	高	大	強	高	大	強	高	大
度数	2	2	0	5	0	5	0	3	2

4. まとめと課題

「力」は強弱で表されることが一般的であるが、接辞として使われる場合には、「高」「大」で表されることがあることがわかった。また、近年は「高」の使用例が増えつつあることも指摘できる。今回は、用例数が少なく論じなかったが、「深」とのゆれもある。ここまで述べた語の中で、「深」も使用された語が36例あった。1例ずつあげる。

例51) 全体としては、「個」の学習を進めることにより、集団の中に埋没する生徒が減り、基礎学力が深まったという(1990.6.28)

例52) 理解力というより、ああ、こうだったかと思いあたる、いわば想起(アムネーシス)の能力が深まっているのです(1999.11.1)

例53) 「(前略)ただ同じ目的を通し、町会員の結束力が深まっている」と近藤さんは意義を話す(2003.6.15)

例54) 応援団長で空手部主将の忍田拓也さん(3年)は「ほかの部活との団結力が深まった。野球部がいいプレーをできるように応援したい」と話していた(2006.7.5)

例55) 指導者の世代交代が進み、経済・政治両面における構造改革への内外の圧力が深まる中で、東南アジア諸国もまた、新たな指針の創造を迫られている(1998.7.5)

例56) なかでも阿国の生命力、そして感情の明暗の深さはとりわけ魅力が深い(2006.2.2)

いずれの例も、「高」「強」との置き換えが可能で、「高」「強」「深」のゆれについても今後、考察したい。

参考文献

国立国語研究所(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
 小学館国語辞典編集部(2000)『日本国語大辞典第2版』小学館

飛田良文・浅田秀子（2012）「つよい」『現代形容詞用法辞典』東京堂

嶺田明美（2015）「形容詞『高い』の使用実態について ―『強い』『大きい』などとのゆれの可能性の指摘―」
『学苑』893 昭和女子大学

嶺田明美（2016）「形容詞『高い』の使用実態について（2） ―『人気』の程度を表す用法―」『学苑』903 昭和
女子大学

参考資料

読売新聞データベース「ヨミダス歴史館」<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>

国立国語研究所コーパス開発センター「近代語のコーパス」http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center

（みねだ あけみ 日本語日本文学科）